紙上展示室 ―旭モノ語り― 第三回

大山石尊奉納木太刀

山岳信仰とよばれるものがあります。日本では古くから神霊が住まう特別な場所として山を崇めてきた歴史があります。江戸時代には「講」をつくって参拝するのが一般庶民の間に定着、物見遊山をかねた一大イベントとなっていました。代表的なものに富士山、出羽三山があり、東総地域には今でもこうした講組織が残っています。

さて、関東で人気の一つだったのが大山詣でした。大山山頂（現神奈川県伊勢原市）の石尊大権現は源頼朝が太刀を納め天下泰平を祈願したのが始まりとされています。それが江戸時代、庶民に木太刀を納める風習として広まったといわれています。参詣者はすでに奉納してあるものを持ち帰り神棚にまつりました。

今回のこの巨大な木太刀もその一つ。宝暦十三年（一七六三年）の銘があり、長さは約四メートル、大きな松材がそのまま太刀の形にあつらえられ、表側には石尊神像が銅で施されています。これほど大型のものは全国的にも例がありません。裏側には旧海上郡、香取郡域の村々から、願主として講中の世話人、太刀の寄付者、参詣人の名がそれぞれ記され、その数は二百名を超えます。

大山石尊奉納木太刀

奉納太刀は一～二メートルのものが一般的ですが、参詣の流行とともに大きさや形が競われるようになりました。これは岩井の滝山として親しまれる龍福寺の本堂内部に掲げられていたもの。現在は大原幽学記念館の郷土展示室で公開しています。住職の土川峰仙氏によれば、実際には代わりの小さなものを奉納用に持参し、こちらは持っていかなかったということです。当時の人々の篤い信仰心と、村を越えたネットワークには圧倒されるばかりです。くわしくは、『海上町史研究』十六号（昭和五十六年）をご参照ください。

龍福寺一帯は県指定天然記念物の森で、自然公園、キャンプ場もあって、歴史と自然の宝庫でもあります。

〔大原幽学記念館　鈴木映里子〕